

第七章 京都地方の塔

第 44 番 八幡山教王護国寺五重塔—真言宗東寺派—

京都市南区九条町

日本で最高最大の木造五重塔を拝観するため教王護国寺を、訪れました。京都駅から歩いて 20 分の距離にあり、駅からも五重塔がビルの谷間から顔を突き出しているのが、眺められます。

教王護国寺というよりも「東寺」の名で親しまれているこの寺は、桓武天皇が延暦十五年・794 年に平安京に遷都したとき、羅生門の東西に二つの寺院を造営し、この寺はそのうちの東寺で、西寺と羅生門は崩壊してその跡をとどめているに過ぎません。その後東寺は、嵯峨天皇より弘法大師に賜って教王護国寺と改称し、真言宗の根本道場として栄え、今日も日本屈指の大寺院となっています。この寺で特筆すべきことの一つは、講堂の内部に 21 体



の仏像が立ち並び、凄まじい迫力で迫ってくる「立体曼荼羅」であります。空海は、密教の世界観を描いた曼荼羅図を立体的に表現することを思い立ち、展開したものです。

もう一つが、現存する木造塔で日本一の高さを誇る五重塔です。五重塔の最初の完成は、元慶七年頃（883）ですが、その高さゆえに度重なる落雷の被害に会っており、今の塔は六代目で、徳川三代将軍・家光によって、正保元年（1644）に再建されたものであります。大工棟梁・中井大和が建立した和様復古の名塔で、一辺 9.15m・総高さ 54.8m、本瓦葺きの堂々とした塔であります。木割りも太く、初層軒下の邪鬼もどっしりしており、匠たちが精魂込めて造り出した塔であります。

第 45 番 深雪山醍醐寺五重塔—真言宗醍醐派—

京都市伏見区醍醐東大路町

山科駅から六地藏行きバスに乗り、20分で醍醐三宝院前に着きます。総門を入ると両側に桜並木の参道が真っ直ぐに延び、左に三宝院、右に霊宝館への道があり、仁王門に至ります。門をくぐって木立の中の道を行くと、金堂と五重塔が建っています。さらに進むと、女人堂が建ち、上醍醐への上り道が続きます。徒歩1時間ほどで西国三十三ヶ所・第十一番札所のある上醍醐の伽藍に着きます。西国三十三ヶ所のうちでも、最大の難所ですが、眺望は、非常に雄大です。醍醐寺は聖宝理源大師が、貞観十六年に上醍醐山上で地主横尾明神の示現により、醍醐水の霊泉を得、小堂宇を建立したことに始まるといわれています。その後



醍醐・朱雀・村上三帝のご信仰がよせられ、醍醐天皇の御願により上醍醐の伽藍が完成しました。それに引き続き下醍醐の地に伽藍が計画され、釈迦堂が建立され、天歷五年（951）に五重塔が落成し、下伽藍が完成しました。

その後、真言宗小野流の中心寺院として仏教史において重要な地位を占めるばかりでなく、時代の政事の中心にあった人たちとの交渉も深く、現在まで隆盛を極めています。秀吉には醍醐の花見を催させたし、江戸時代には三宝院に属する修験を「当山派」と称する許可を幕府から得ています。

五重塔は、醍醐天皇のご冥福を祈るために朱雀天皇が起工、村上天皇の時代に完成しました。この塔は、細かい装飾は皆無で、その木組みは非常に巧緻であります。相輪は長大で見事な全体バランスをかもしてしています。一辺 6.58 m・総高さ 37.4m、本瓦葺きで、軒の出は深く、端の反りも軽快で、安定感と優美さが遺憾なく発揮された最高級の名塔であります。

法隆寺・瑠璃光寺の五重塔と共に日本三名塔に挙げられています。

第 46 番 補陀洛山海住山寺五重塔—真言宗智山派—

京都府相楽郡加茂町例幣

鎌倉時代の建立で、全国で唯一残存している五重塔を拝観するため、相楽郡を訪れました。海住山寺は、加茂駅から車で、木津川を越えて山手に 10 分ほど走った山の中腹で瓶原を一望におさめられる地にあります。

この寺は、大廬舎那仏像建立を発願された聖武天皇が、その工事の平安を祈るため、良弁僧正に一宇を建てさせ、藤尾山観音寺と名づけた天平七年始まるといわれています。不幸にして、保延三年に焼失いたしました。その後、承元二年（1208 年）に解脱上人貞慶が、観音寺廃址に移り住み、草庵をいとなんで海住山寺と名づけ、旧寺を中興されました。

塔は、貞慶の一周忌に、弟子の慈心上人覚真が先師の供養のために建てたものです。塔は、勾欄のない広い縁に囲まれて裳階が立ち、柱は角柱、初層本体の組物は二手先、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木を用いています。初層の内部には、珍しく心柱がありません。最大の特色は初層に吹き抜けの裳階が付いていることで、五重塔で裳階の付くのは法隆寺とここだけです。この塔は、和様、一辺 2.74m・総高さ 17.7m、本瓦葺きで、小型ですが全体的にしっかりとまとまった精巧な木組みを有し、端正な姿をしています。



第 47 番 靈応山法観寺五重塔—臨濟宗建仁寺派—

京都市東山区八坂通下河原東入八坂上町

法観寺は、今では寺域が町屋に侵食され、古都京都らしい家並みの中にひっそりとただびただびだけになってしまっています。

寺伝によれば、聖徳太子が如意輪観音の夢のお告げにより建立し、往時は延喜式七ヶ寺のひとつに数えられ八坂寺と呼ばれ隆盛を極め大いに栄えたようです。現在は、五重塔と太子堂、薬師堂の二字を残すのみとなりました。

通称「八坂塔」は、聖徳太子が仏舎利三粒を奉じて建てられたものと伝えられています。現在も心柱の礎石が三重孔になっていて、その中に銅筒が納められ石蓋で覆われており、初めの塔が仏舎利塔であったことがわかります。再三の再建にも礎石・位置は変わることなく建てられ、現在の塔は足利義教が永享十二年（1440）に再建したものであります。

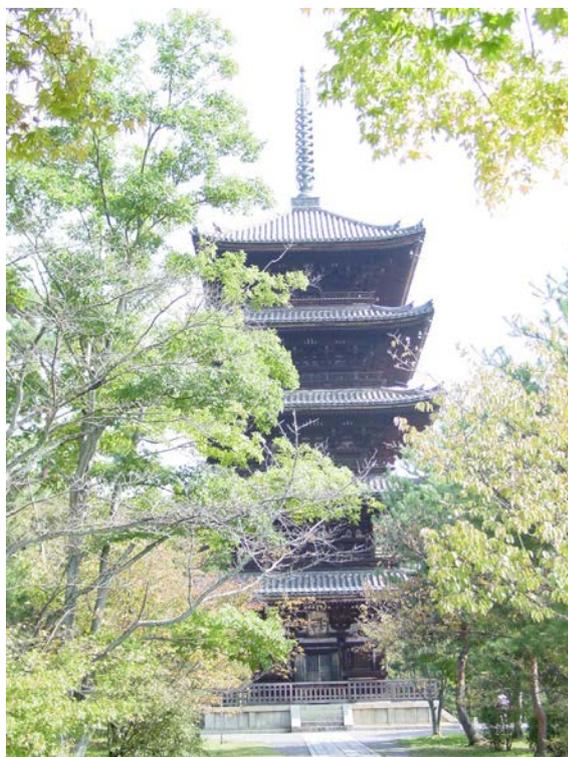
塔は、本瓦葺き、一辺 6.20m・総高さ 36.4mの純然たる和様で、白鳳時代の建築様式を今に伝えるものです。初層の中央間は板唐戸、脇間は連子窓で、組物は三手先、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木を配しています。内部には心柱が通り、その基に巨大な当初の礎石があります。特徴は、展望要素を持った勾欄を五層のみにめぐらせて、初層から四層まで勾欄がないことです。透減率は小さいが、中世和様塔婆の偉容を誇る京都のシンボルであります。



第 48 番 大内山仁和寺五重塔—真言宗御室派—

京都市右京区御室大内

徒然草とおかめ桜で有名な仁和寺を訪れ、五重塔を拝観しました。仁和寺は、京福電鉄御室駅で下車すると、すぐ正面に仁王門があります。歴史は光孝天皇が「西山御願寺」の建立を発願されたことに始まりますが、天皇の崩御により、次の宇多天皇が先帝の御意志を継がれ造営を完成されました。西山御願寺は完成と共に、先帝から受け継がれた「仁和」の年号をもって寺号と定められ、大内山仁和寺と呼ばれるようになりました。宇多天皇が、退位後出家してここに入ってから御室御所と呼ばれるようになりました。平安時代中期から鎌倉時代にかけて大きく栄えることになりましたが、応仁の乱によって一山ごとく焼失いたしました。応仁の乱から百数十年後、徳川三代将軍家光の時代になって、今日見られるような仁和寺として再興されることとなりました。



仁王門をくぐると広々とした境内が開け、先方の石段の上に中門が見え、その奥は松の茂みの中に金堂が、左手に御室桜と観音堂、右手の木立の中に五重塔が建っています。寺の創建時に建てられた塔は、度重なる兵火で焼け、現在のものは三代将軍家光によって寛永十四年（1637）に建てられた復古式五重塔であります。旧基壇の上に縁をめぐらさないで立ち、組物は三手先で、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木を用い、初層軒下隅垂木上には邪鬼を置いています。本塔は、一辺 5.91m・総高さ 32.7m、おおむね和様の本瓦葺きです。江戸初期の復古式の代表作といえる名塔は、御室桜の花間からの眺めが一番良く映えます。

第 49 番 小田原山浄瑠璃寺三重塔—真言律宗—

京都府相楽郡加茂町

浄瑠璃寺へは、近鉄奈良駅からバスに乗り約 35 分で浄瑠璃寺前の停留所に着きます。参道を進み、山門をくぐると目の前に宝池が広がります。そして左手の石段の上に三重塔が西向きに建ち、池をはさんで本堂が東面しています。三重塔に安置されている薬師如来は、東方瑠璃光浄土の教主で、遣送の仏といわれます。即ち、衆生を過去からこの世（此岸）へ送り出した仏であります。対する本堂の阿弥陀仏は、西方浄土（彼岸）へ迎える来迎の仏であります。

浄瑠璃寺は九体寺とも呼ばれ、寺伝によれば永承二年に僧義明によって開かれました。当初は、西小田原寺と呼ばれ、僧侶の隠遁所・別所だったといわれます。嘉承二年（1107）本尊阿弥陀如来を西の堂に移し、新しい本堂を造り、翌年仏像開眼供養が営まれました。これが九体阿弥陀堂で、保元二年（1157）にこの堂を現在地に移したと伝えられています。

堂内には、九体の阿弥陀仏、美しい吉祥天立像、コンカラとセイタカ童子を従えた不動明王立像等のあこがれの優美な仏が並んでいます。

三重塔は、治承二年（1178）に京都一条大宮から移築されたと伝えられています。平安時代の建立、一辺 3.04m・総高さ 16.4m、栓皮葺きで和様の繊細な感じのする美しい塔であります。



第 50・51 番 音羽山清水寺三重塔・子安塔—北法相宗—

京都府京都市東山区清水

京都駅から市バスに乗り、「清水道」で下車し、清水坂を 15 分ほど登ると仁王門の前に着きます。

縁起は、千二百余年前、音羽の滝の上にある草庵に延鎮という僧が、観音像を祀ったことに始まります。延鎮と坂上田村麻呂が出会い、田村麻呂が観音に帰依し仏堂を建立し、その後長岡京の紫寝殿を移築、奉納して本堂としました。

清水寺は、興福寺に属した関係で、比叡山との抗争の場となり、たびたび兵火に見舞われました。

現在のような伽藍になったのは、江戸時代三代将軍・徳川家光により再建され、現在の本堂も建てられました。

三重塔は、焼けては建てる繰り返しで、現在の塔は、寛永十年（1633）徳川家光によって再建されたもので、三重塔としては屈指の大きさを誇り朱も鮮やかな古様の塔です。一辺 5.20m・総高さ 25.0m で本瓦葺きです。

もうひとつの塔である子安塔は、建立年代と経緯は良く解りませんが、江戸時代初期のものと思われます。泰産寺の名前で呼ばれ、明治になって寺が廃されたので、入口の仁王門のすぐ下にあったものを、この丘の上に移し再建したものです。愛らしいという表現がぴったりの和洋の塔は、一辺 2.5m・総高さ 12.0m で、檜皮葺きです。



第 52 番 天王山宝積寺三重塔—真言宗智山派—

京都府乙訓郡大山崎町大山崎

龍神が伝えたという打出の小槌がおさめられていることで有名な宝積寺に桃山時代の三重塔があることを知り、早速拝観に訪れました。宝積寺は、山崎駅で下車して線路沿いにしばらく進み、線路を横断して天王山の方へ登って行くと約 20 分で仁王門に着きます。

宝積寺は、寺伝によると聖武天皇の勅願により行基が開き、平安時代の長徳年間に寂昭和尚によって中興されたと伝えられ、平安時代末期から略して「宝寺」と呼ばれるようになりました。

鎌倉時代には、足利義満より庇護を受け、数多くの僧坊も建てられたが、応仁の乱で焼かれ、桃山時代に入って豊臣秀吉の庇護を受け復興しました。

仁王門に安置されている金剛力士像は、鎌倉時代の作で重要文化財に指定されています。門をくぐると正面に本堂が見え、それに向かって参道が、繋がっています。本堂に向かって右手に建つ三重塔は、「豊公一夜の塔」と称し、豊臣秀吉が、明智光秀との合戦で亡くなった人の霊を弔うため、一夜で建立したという逸話が残っています。実際は、慶長九年（1604）に豊臣家の寄進で建てられました。勾欄のない縁をめぐるして立ち、組物は三手先、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木を用いています。おおむね和様の、室町時代の復古調を踏襲して建てられた塔で、一辺 3.84m・総高さ 19.57mであります。桃山時代の三名塔のひとつです。



第 53 番 深草山宝塔寺多宝塔—日蓮宗—

京都市伏見区深草宝塔寺山町

京阪深草駅で下車し、街を南に進み山手のほうへ JR 線路を横断して少し登ると約 10 分で宝塔寺仁王門に着きます。仁王門をへだてて境内の中央にある本堂は、京都市最古の建物です。

宝塔寺の前身は嘉祥年間に、藤原基経が創建した真言宗の極楽寺でした。時代は下って、鎌倉時代末期・徳治二年に住職良桂律師が日像上人の説法に信伏し弟子になり、日蓮宗に改宗しました。日像の死後に、日蓮・日朗・日像三代上人の遺骨を納めた塔があることから、宝塔寺と称するようになりました。天正十八年に日銀上人が八世を継ぎ、諸堂の再建に着手し、慶長十三年（1608）に本堂と多宝塔が落成しました。多宝塔は、一辺 2.90m・総高さ

11.4m、屋根は行基瓦葺きで、端正で美しい小塔です。塔身はやや細長い比例を持っていますが、軒のでは、下重では柱間の半分、上重では直径と同じだけ出ています。応仁の乱の兵火を逃れて建っている珍しい建物のひとつであります。



第 54 番 雲晴山大福光寺多宝塔—真言宗御室派—

京都府船井郡丹波町

下山駅で下車し、谷を下り川を渡って又上り、田んぼ道を進み、灌漑用のため池の横を抜けて約 25 分歩くと、大福光寺に着きます。境内は、木々に囲まれ鐘の無い鐘楼、塔、本堂が訪問者のめったにいない丹波の田舎の散村の中に、ひっそりと佇んでいます。

縁起は、延暦年間に、鞍馬寺中興・法印釈法延が、当寺の北東約 2km の空山上に創建したとされ、嘉暦 2 年(1327)足利尊氏が山上から現在地に移したと伝えられています。

参道の正面に、五間四方の大本堂である毘沙門堂は、檜皮葺きで、力強く建っています。正面の左手に立つ多宝塔は、様式等から室町時代中期建立と



され、一辺 3.90m・総高さ 13.27mの美しい塔です。難をいえば、下重の平面規模が高さの割りに小さく、軒の出が浅いので、全体に細長くなりやや安定感に欠けるところがあります。

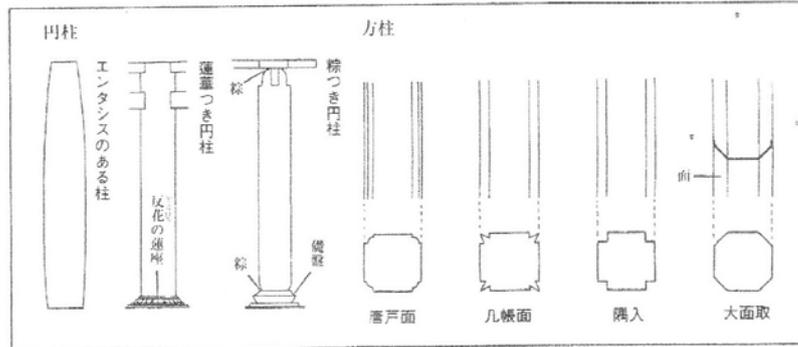
宮大工のざれごと⑦規矩術

規矩術の「規」とは「ブンマワシ」という道具で、コンパスのことです。また「矩」は「サシガネ」のことです。だから規矩術とは「円と直角を使いこなす術」だとも読めるわけです。それではサシガネの目盛は、円と直角を使いこなすためにどのようになっているのでしょうか。まず丸太から取れる角材の一辺の長さを出す場合に、サシガネの「表目」を丸太に当てて、丸太の直径を測り、表面の位置を押さえておいて、サシガネを裏返して指で押さえてある位置の「裏目」の目盛を読みますと角型の正方形の一辺の長さになっています。即ち、表目の目盛は正規の寸法表示をしてあり、裏目の目盛は正規の寸法の $\sqrt{2}$ 倍で表示してあるのです。従って、ピタゴラスの原理により、丸太の直径から正方形の一辺に換算される訳です。同様に折れ曲がった短い方の裏目側には、「丸目」という目盛が打ってあります。丸目というのは正規の寸法の $1/\pi$ 倍で打ってあります。従って、丸太の直径を丸目で測るとすぐに円周の長さが分かる訳です。

宮大工の知識—Ⅶ軸 部

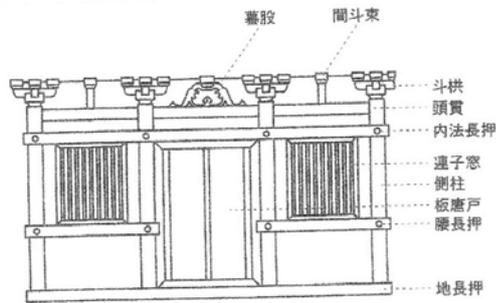
柱

寺社建築では、柱の基本は円柱(丸柱)である。裳階や庇・向拝などに方柱(角柱)を用いる。

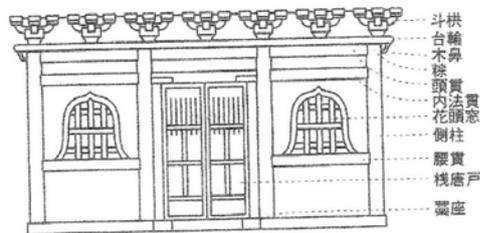


頭貫
長押
貫

柱は縦材であるが、これを固定するためには横材が必要である。柱を固定する横材の代表的なものに頭貫と長押・貫がある。さらに柱上には桁と梁が渡され、ほかに台輪・棟木・通肘木・地覆などがある。



和様



禅宗様